

看護実践に求められる思考力を育成する —講義・演習で思考力を育成する教育方法—

池西 静江[†]第66回国立病院総合医学会
(平成24年11月16日 於神戸)

IRYO Vol. 68 No. 2 (72-75) 2014

要旨

看護基礎教育修了時の看護実践能力の低下が問題視されるようになって久しい。看護基礎教育における看護実践能力の育成をめざす効果的な教育方法・評価の検討は喫緊の課題といえる。なかでも看護実践に欠かせない思考力をどう育成するか、は重要な課題である。長く看護基礎教育現場に身を置き、教育課程の変遷や学生の変化に対応すべく、教育方法を中心に試行錯誤を重ね、さまざまな取り組みを行ってきた。そのなかで、思考力育成にむけた効果的な教育方法について、いくつかの示唆を得たので紹介する。一つ目は教材研究と授業展開に関することである。事例や看護場面を教材化し、授業の導入部分で、学生に思考を促す課題を含む事例や看護場面を提示し、その課題に取り組むのに必要な専門的知識や経験知を引き出し、それを活用して授業の最後に自分でその課題についての答えを導くという授業展開である。学生は授業に熱心に参加し、主体的に課題に取り組む姿がみられる。二つ目はPBL(problem based learning)テュートリアル教育である。問題状況を含む看護の事例を提示し、小集団学習で、自ら学習課題を見だし、主体的に学習活動に取り組むことを期待する。この方法の導入により、わからないことは調べる、自分で考えることができる学生たちに徐々に育っている。それらはいずれもシミュレーション教育であり、学生参加型の教育である。教員が教えるのではなく、学生が主体的に学ぶ授業づくりが思考力育成に欠かせないものであると考える。

キーワード 教材化, 学生参加型, PBL テュートリアル教育

はじめに

一人ひとりの訴えに耳を傾け、状態を観察し、適切な方法で確実な技術を用いて実践し、その成果を評価する。この一連の看護実践に欠かせないのが思

考力である。思考力は知識を蓄積する暗記型の教育方法で育成できるものではない。思考力を広く人間の知的作用と捉えるならば、看護実践に必要な思考力は、①経験知を含めて蓄積された知識を対象の状況に応じて想起・統合する力、②想起・統合した知

(専)京都中央看護保健大学校 看護学科設立準備室 †看護師
別刷請求先：池西静江 (専)京都中央看護保健大学校 看護学科設立準備室 〒617-0006 京都府向日市上植野町大田5-15
e-mail: sl224ikenishi@ares.eonet.ne.jp

(平成25年3月11日受付, 平成25年11月1日受理)

Professional Training to Foster the Thinking Ability Required for Nursing Practice : Through Lectures and Seminars
Shizue Ikenishi, Kyoto Central School of Nursing and Health

(Received Mar. 11, 2013, Accepted Nov. 1, 2013)

Key Words : teaching materialization, active learning, problem based learning

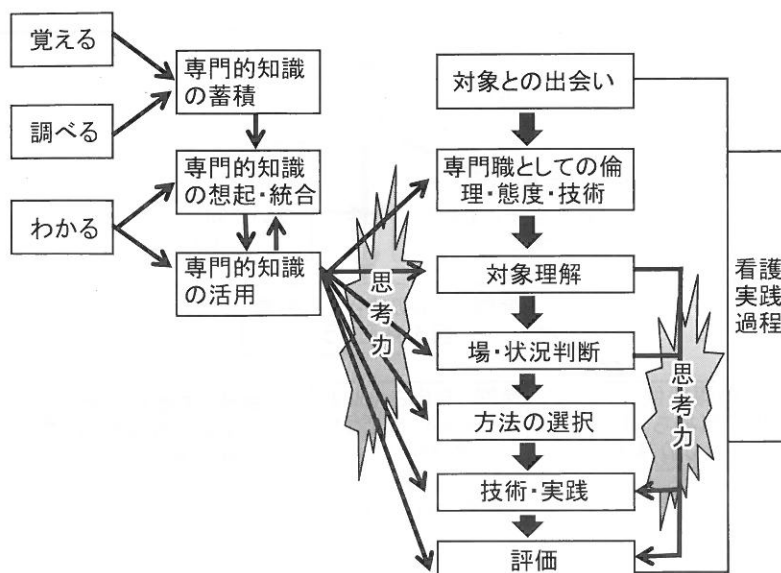


図1 看護実践と思考力

識を活用し、対象の状況を判断する力、③状況判断に基づき看護の必要性を明確にして、看護の方法を選択する力、④看護実践を振り返り的確な評価をする力、と考える。

これらの思考力を育成する効果的な教材はリアル¹⁾な事例や看護場面である。看護基礎教育における授業形態のなかで、リアルな事例や看護場面を扱うのは臨地実習である。そこに臨地実習の重要性を確認するが、一方では、総授業時間数の2/3を占める講義・演習において、いかにリアルな事例や看護場面を導入し、考える授業を行うことができるかは、思考力の育成に大きな影響を与えるものだと考える。

そこで、これまでの教育経験から思考力育成に効果的と考えられる教育方法を紹介したい。一つ目は講義における事例・看護場面の教材化および授業展開の工夫の取り組みである。二つ目は演習におけるPBL (problem based learning) テュートリアル教育である。いずれもシミュレーション教育であり、学生の主体性や考える力を引き出す教育方法である。

1. 看護実践と思考力

看護実践の過程と必要な思考力を図1に表した。看護過程のあらゆる場面において必要となるのが思考力である。言い換えれば看護実践能力の中核をなすのが思考力であり、思考力の育成は看護実践能力の育成につながるものと確信する。

2. 看護実践に求められる思考力をどう育成するか
田中耕治氏は学習者を真正(リアル)な課題に取り組みさせることにより、生きて働く学力が形成される、と説明している¹⁾。

看護教育においてリアルな課題とは、事例や看護場面であろう。そして、生きて働く学力は看護実践に求められる思考力につながるものであろうと考える。

講義や演習において、このリアルな課題、事例や看護場面をどう教材化するか、そして、それを授業形態に応じてどう展開するかを考える必要がある。これはシミュレーション教育の充実・拡大であろう。

3. 講義法における看護場面の教材化と授業展開

新人看護教員の授業研究会を紹介する。授業科目は「小児の健康問題と看護」である。単元は「手術療法と看護」で、テーマは手術を受ける小児のプレパレーションである。まず、教員の臨床での経験事例、看護場면을教材化する段階である。まず、教えたことを明確化する。その結果①発達段階を踏まえた看護、②手術を必要とする子どもの特徴とその理解、③家族看護の3点であることを確認した。その次に、「教材」にするために実際の看護場面を加工する。開発した教材は以下のようなものである。

3歳10カ月のしんのすけ君 父母と姉(5歳)の4人家族。生後3カ月の時 心室中隔欠損症で姑息手術を受け、今回は根治術のため入

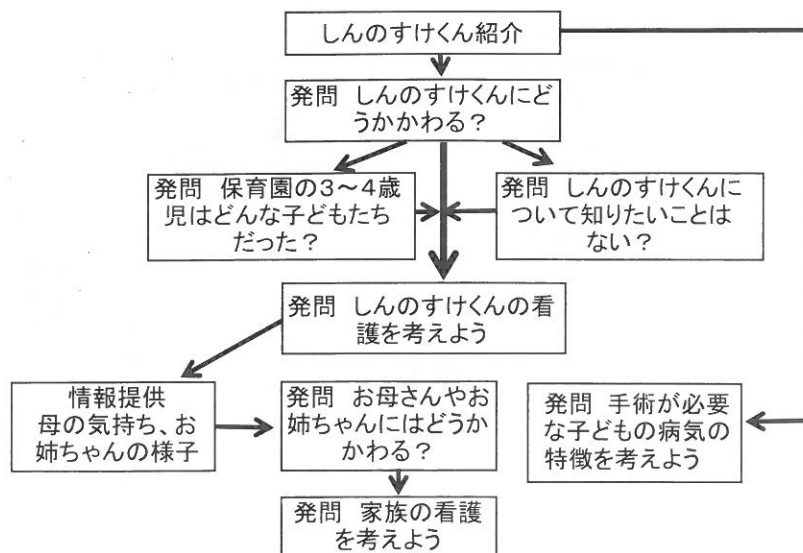


図2 授業展開案

院した。小さいころから定期的に外来受診をしており、病院を嫌がることはない。今回入院して手術することは母親から聞かされていたが、いつもと違う場所に来て、手術は嫌だと駄々をこねている。一緒に来た姉は母親のそばから離れず不安な顔で様子を見ている。母は「おねえちゃんが最近幼稚園へ行くのをぐずって、『私もママと一緒にがいい』って私から離れなくて…、心配です」と話す。

次に、学習者が授業に参加できる授業展開を考えた。

授業は概ね学習指導案どおりに進んだ。学生の授業の反応はとてもよく、全員がしんのすけ君のかかわりやお姉ちゃんへの対応、先天性疾患をもつ子どもに対する母親の気持ち、父親を交えた家族看護などを真剣に考え、討議する姿がみられた。授業評価もとてもよいものであった。事例や看護場面を教材化する意義を再確認するとともに、授業の導入で、「どうかかわるか？」と発問を投げかけ、その回答を導き出す授業展開は学生の興味・関心を持続させる効果がある。

4. 演習における PBL テュートリアル教育

PBL は臨床でおこりうる状況・場面を、問題状況を含む課題（シナリオ）として提示し、その状況や場面に含まれる問題や学習課題を自ら発見し、学習することで、状況判断能力や問題解決能力をつけ

ることを期待する教育方法である。

さらにテュートリアル教育は小集団で、学生の主体性、相互作用のプロセスを大切するものである。

したがって、PBL テュートリアル教育の特徴は、①学習内容はある状況、場面として示される、②学生のニーズは学生間の対話や相互作用のプロセスで発見する、③小集団で、学生主導で行う、教員はテューター（学習支援者）としてかかわる、④「どのように学ぶか」を学ぶのである。

図3はPBL テュートリアル教育の展開例である。問題を含む課題（シナリオ）として以下のような状況を設定した。

あなたは実習生として、林さんを受け持つことになりました。林華子さんは86歳女性です。肺炎で5日前から高熱が持続しています。咳嗽、喀痰が多く、力のない咳をしては「しんどい」といっています。

まず、自分の学習目標を設定して、グループでシナリオを読む。林さんの看護をするとき、どんな学習が必要かをグループで討議して、学習課題を明確にして、学習計画を立てる。学習計画に沿って、グループであるいは個人で次回までに自分の調べた内容をグループ員にプレゼンテーションできるように準備する。同時に自分の学習活動を評価する。

これを授業回数（5回～7回）のなかで、課題達成をめざして繰り返すのである。その学習過程を通して、呼吸器の解剖生理の復習をしたり、肺炎の種

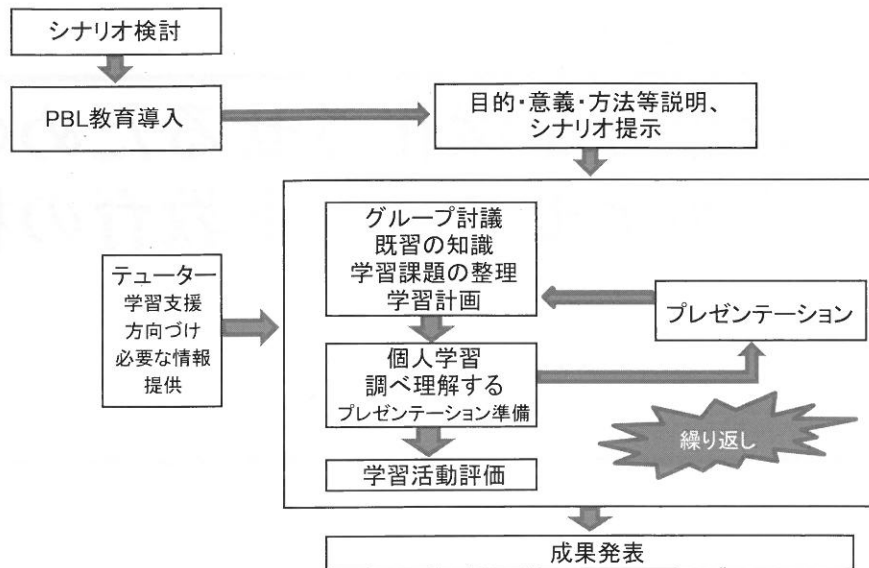


図3 PBL テュートリアル教育の展開

類を調べたり、発熱、咳嗽、喀痰のメカニズムなどの学習の課題を発見し、それに主体的に取り組む。

シナリオの中の林さんの「しんどい」「咳」「痰」「熱」をなんとかしたい、という気持ちで、書籍をひもとき、病態を理解し、看護を考えるのである。

この学習成果はわからないことを調べる学習習慣の形成、覚えるのではなくわかることの面白さ、思考の道筋、方法の理解につながるものである。もちろん、学生の授業の満足度は高く授業評価もよい。

おわりに

臨地実習のみで看護実践に求められる思考力を育成することはできない。看護基礎教育の大半を占める講義・演習にシミュレーション教育を取り入れ、自ら考え、主体的に学ぶ教育方法の積極的導入が必要である。

今回、その具体的方法として、講義では看護場面・事例を教材にして、まず、導入で事例を紹介し、事例の看護について、授業を通して自分で発見する、という授業展開が学生の頭を動かし、授業の最後ま

で、興味・関心を継続させる効果があった例を紹介した。そして、演習ではPBL テュートリアル教育を紹介した。PBL テュートリアル教育の効果については、すでにいろいろな文献で紹介されているが、実際行ってみて、主体的な学習活動、問題解決のための学習、看護を考える学習、としてその有効性を再確認するものであった。

卒業時の看護実践能力の低下が指摘されて久しい。看護基礎教育においてどのように実践能力を育成するか、その中核になる思考力を育成する教育方法の検討は喫緊の課題である。

〈本論文は第66回国立病院総合医学会シンポジウム「学生の思考を育てる」において「看護実践に求められる思考力を育成する」として発表した内容に加筆したものである。〉

[文献]

- 1) 田中耕二, 水原克敏, 三石初雄ほか. 新しい時代の教育課程. 第3版. 東京: 有斐閣; 2011.